

平成12・13年度 プロジェクト研究 教材教具の試作研究報告書

**重度・重複障害児のための
「応答する環境」の開発についての実際的研究**

平成14年3月

独立行政法人 国立特殊教育総合研究所

ま え が き

平成12年度及び13年度の2か年間にわたり、障害の重い子どもたちのコミュニケーションや遊び、自己表現など様々な活動面において、重度・重複障害児の周囲の人や事物との双方向のやりとりを支援するため、個々のニーズに応じた教材の製作・開発の研究を進めてきました。

子どもは様々な遊びの中で主体的に自己決定しながら周囲の人やものにかかわっていく態度、意欲を育てていきますが、重度の障害のある子どもたちは、発達の初期段階から健康面の不安定さや、運動・移動及びコミュニケーションの制約等を抱え、生活の中で遊びを主体的に選択し、十分にその活動を楽しみながら、遊びを発展させる機会に乏しいと言われます。

最近、盲・聾・養護学校においては、パソコン等の情報機器が指導に積極的に導入されつつあります。重度・重複障害児の指導においては、その主体的な活動を引き出すために、遊びや様々な活動場面に、身の回りにある電動の玩具や電化製品をスイッチで動かすような「シンプルテクノロジー」と呼ばれる工夫された教材教具を用いたり、日常のコミュニケーションにVOCA（音声出力装置）などのコミュニケーションエイドを使った指導が行われています。

しかし、これらのエイドを早期に利用することに対して教師の抵抗感があったり、活用したいと思う教師や保護者にとっては、それらの教材教具についての情報の不足や、子どもへの適合性とその効果について実際に確認する場や機会が非常に限られているなどの制約により、結果的にこれらの支援機器が生活の場で十分に活用されきれていないケースも多いのが現状です。

重度・重複障害児のための「応答する環境」を考える場合、子どもたちを取り巻く環境の＜もの＞の応答性と共に、環境としての教師や指導員、保護者を始めとする＜ひと＞との相互性を併せて考える必要があります。

本報告書は、重度・重複障害のある子どもが、「応答する環境」を通して、それぞれの身近な環境とより深く、より広く切り結ばれ、様々な文化的実践へと乗り出すための支援のより一層の充実を願って作成されました。

重度・重複障害児の教育や療育に携わる多くの方に本報告書をご高覧いただき、皆様のより良い教育実践にお役立ていただければ幸いです。また、今後の研究の進展のためにも是非とも忌憚のないご意見・ご要望をお願いいたします。

本研究に当たり、ご協力いただいた別記の研究協力者、研究協力機関の方々に対しましては、心より感謝の意を表する次第です。

平成14年3月

独立行政法人

国立特殊教育総合研究所理事長

細 村 迪 夫

研 究 組 織

< 研究代表者 >

後上鐵夫（重複障害教育研究部長）

< 研究分担者 >

川住 隆一 重複障害教育研究部重複障害教育第三研究室長

佐島 毅 重複障害教育研究部重複障害教育第二研究室主任研究官

石川 政孝 重複障害教育研究部重複障害教育第三研究室主任研究官（企画・実施）

< 研究協力者 >

畠山 卓朗 横浜市総合リハビリテーションセンター泥亀福祉機器支援センター長

小松 敬典 東京都立府中養護学校教諭

松本 廣 群馬県総合教育センター主任指導主事

山本 修子 社会福祉法人みなと舎・ゆう援助課長

石戸谷恒鋭 国立久里浜養護学校文部教官教諭（平成 12 年度）

現青森県立弘前第二養護学校教諭

村山小百合 国立久里浜養護学校文部教官教諭（平成 13 年度）

< 研究協力機関 >

社会福祉法人みなと舎・ゆう

東京都立府中養護学校

群馬県総合教育センター

横浜市総合リハビリテーションセンター

国立久里浜養護学校

< 本報告書執筆者 >

畠山 卓朗 横浜市総合リハビリテーションセンター泥亀福祉機器支援センター長

小松 敬典 東京都立府中養護学校教諭

松本 廣 群馬県総合教育センター主任指導主事

山本 修子 社会福祉法人みなと舎・ゆう援助課長

佐島 毅 重複障害教育研究部重複障害教育第二研究室主任研究官

石川 政孝 重複障害教育研究部重複障害教育第三研究室主任研究官